社会科

教科領域研究テーマ

【社会にふみだす「知」の形成

― 学び合い，互いに考えを広げ深める学習活動を通して ―】



社会にふみだす「知」の形成

― 学び合い，互いに考えを広げ深める学習活動を通して ―

実　践　者　西田　剛志，田中　寿佳，宮本　真人
愛媛大学研究パートナー　川岡　　勉，森　　貴子，矢澤　知行，張　　貴民
川瀬久美子，魁生由美子，松野尾　裕，蘇　　卓三
鴛原　　進，福田　喜彦，中曽　久雄

第１章　はじめに

社会にふみだす「知」とは，子どもたちが国家・社会の形成者として基礎的・基本的な知識，概念や技能を獲得し，様々な人や事象と関わりながらよりよい社会の形成に主体的，創造的に取り組もうとしたり学んだことを活用したりしていこうとする資質や能力，意欲や態度を示している。これを育成するために，次の二つの点を中心に研究・実践を進めることとした。

１　問題解決的な学習の充実

これまでも，問題解決的な学習過程を柱とし，社会的な見方や考え方を成長させるために，教材を工夫したり，問いの質を向上させたりするなどして，生徒が単元を通して強い問題意識を持って主体的に問題解決に取り組むよう学習展開や学習指導方法を工夫してきた。昨年度の研究では，生徒の探究心をくすぐるような学習問題が自他の学びを活かそうとする生徒の姿につながることがわかった。本年度はさらに，「育てる」から「育つ」への指導観の転換を図り，身に付けた知識，理解，概念等を生徒が活用し，生徒自身が持っている力を引き出して問題解決に至ることができるような学習問題や単元構成を工夫していく。

２　生徒どうしの学び合いの充実

社会科の究極のねらいは公民的資質の育成であり，独りよがりの判断ではなく，社会的事象を多面的・多角的に捉え，より公正性や妥当性を重視して思考，判断する力が必要であると考える。自分とは異なる見方や考え方を持つ人との学び合いを通して，自分の考えを再構築したり，見方や考え方を広げたりする経験の積み重ねが大切である。これまでも各自の学習成果を可視化し，それを互いに活かし合える学習活動の充実を図り，その効果が実証されている。さらに，生徒どうしの関わり方を「きょうどう」の精神を発揮させるということを意識してコーディネートすることで，社会にふみだそうとする原動力となる自尊感情を醸成していく。

以上の二点を中心に，各分野で次のようにテーマを設定し，学習活動を工夫した。

地理的分野……広い視野から社会を捉える社会科学習の展開
歴史的分野……社会のつながりが分かる社会科学習の展開
　　社会が「分かる」社会科学習の展開

第２章　研究の実際

研究（その１）

広い視野から社会を捉える社会科学習の展開
― 地理的分野　身近な地域の調査の実践より ―

（実践者）西田　剛志

１　研究テーマ設定の理由

今日的な課題である「持続可能な社会の形成」に向けて，社会の形成者である私たち一人一人が現在の社会の姿を的確に捉え，よりよい未来社会を予想し，その形成に向けて社会参画していくことが求められる。このうち「空間」的に認識することが求められる地理的分野の学習においては，生徒に自分を取り巻く世界，我が国，そして身近な地域を，現在のみならず過去から，そして未来へと，広い視野から社会を捉える態度を養うことは，「持続可能な社会の形成」のために「社会」に参画していく上で欠くことができないと考え，本研究テーマを設定した。

本年次は，前年次までの研究の成果を継承するとともに，研究の重点項目の一つ『持続可能性を見据えた「自己―他者―社会」観が育つ教育活動の展開』を中心に，『「きょうどう」の精神を発揮する学び』を求めて，次のア・イの「研究の内容と方法」により学習展開の工夫をすることとした。

ア　問題解決的な学習の充実　～「育てる」から「育つ」へ～
　生徒に広い視野から社会的事象に主体的に向き合わせるために，興味や関心，課題意識を活かしながら課題を追究させていく問題解決的な学習を取り入れる。その際，「自己」の追究のために必要となる，今までに得た学習方法や「他者」の学習成果を課題追究に活かせるよう学習展開の工夫をする。

イ　生徒どうしの学び合いの充実　～自尊感情の醸成へ～
　すべての生徒が協働学習者としてお互いの学びに活かされ合っていると感じさせるために，「自己」の追究のために得た情報を持ち寄り，社会的事象を説明したり論述したり，あるいは「他者」の追究のための情報を提供し合ったりするなど言語活動を充実させるとともに，その姿を可視化する。

そして広い視野から社会を捉え「社会にふみだす知」，すなわち持続可能な「社会」の形成に参画しようとする資質や能力，意欲や態度の育成に向けて，地理的分野の学習を通して研究実践した。

２　研究の実際

(1)　単 元 名　　身近な地域の調査

(2)　生徒について

本研究実践当初１年生であった生徒たちは，自己の有用性について消極的に捉えていた。しかし，小集団学習でコミュニケーションボードを用いた問題解決的な学習を行ったり，お互いが協働学習者として追究する場面を設定し，生徒の追究成果やそれが活用され学習が深められている姿を可視化したりしたことにより，次第に自己の有用性を肯定的に捉える生徒が増えてきた。本年次研究実践対象学級生徒のおよそ９割は，小集団学習においてお互いの協働学習者としての有用性を感じられるようになっていた。その理由として生徒は，「視点が違うと世界が広くなった気がする」「自分では分からないことも，人と共有し合えるので，学習が深く入ってくる」「みんなの意見を聞いて自分の考えにつなげることができる」などを挙げ，他者の学びが自分の学びを

より深めると感じていた。また，「少人数なので，緊張せずに思ったことをそのまま口に出せる」「分からないことを聞ける」「少し緊張した感じが和らいで，気楽に自分の意見が言える」などを挙げ，学習に参加しづらかったり十分に理解が進まなかったりする生徒の学びを保障しているものと捉えていた。以上のように本実践対象学級の生徒は，互いの自尊感情が醸成できる集団でありお互いが学び合える場となりつつあると言え，本年次の「研究の内容と方法」を繰り返し実践することで，より質の高い学びの集団へ成長すると考えた。

(3) 本単元と研究テーマとの関連

本単元は，身近な地域に対する理解と関心を深めて地域的特色を捉え，地域のよさや課題を見いだし，地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養うことを主なねらいとしている。この単元の学習は，世界と日本の様々な地域を学習した後の地理的分野のまとめとして位置付けられている。そのため問題解決的な学習を展開する中で，生徒は既習知識や概念，技能を活かすことができる。そこで身近な地域を様々な視点から多面的・多角的に追究させることで，本研究が目指す広い視野から社会を捉える態度を養うことができる。また，自分が生活している身近な地域を学習対象としており，生徒に学習への興味をわかせ地域社会への理解や関心を深めさせやすいことから，生徒に社会の形成者の一人としての自覚を持たせ，よりよい未来社会の形成に向けて社会参画していこうとする態度を養う上でも重要であると考えた。

(4) 単元目標

観　点	目　　標
社会的事象への関心・意欲・態度	身近な地域の調査とその地域的特色，地域のよさや課題に対する関心を高め，それを意欲的に追究し捉えようとする。
社会的な思考・判断・表現	身近な地域の地理的事象から地域的特色を捉え，様々な視点や方法をもとに多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現できる。 追究成果を基に，考察した結果を級友に説明したり，級友から新たな意見を得て自分の考察に活かしたりすることができる。
資料活用の技能	地図，主題図，統計資料，携帯情報端末などから問題解決に有用な地理的な情報を適切に選択し，主題図や文章として整理することができる。
社会的事象についての知識・理解	身近な地域の調査について，調査の視点や方法，まとめ方や発表の仕方を理解するとともに，調査した地域の地域的特色，よさや課題についての知識を身に付ける。

(5) 指導計画

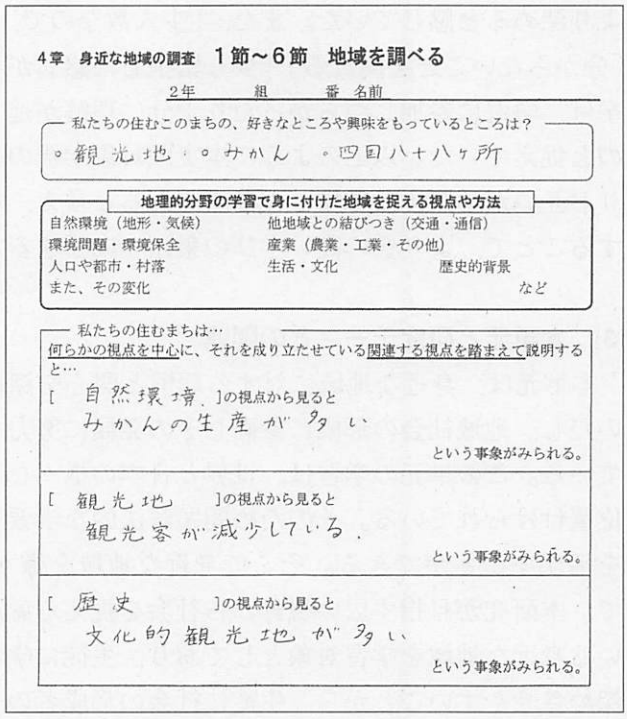
次	主な学習内容	◇評価規準（観点）	時間
1	身近な地域の地域的特色を捉え，よさや課題を見いだそう。	◇身近な地域の地理的事象に対する関心を高め，その地域的特色を捉え，よさや課題を見いだそうとしている。（関心・意欲・態度） ◇身近な地域に関する地理的事象についての追究に必要な資料を適切に活用し，自分なりに解釈して主題図や文章に整理することができる。（資料活用） ◇身近な地域の調査方法や地域的特色を示す事象について理解している。（知識・理解）	6
2	身近な地域をよりよくするための提言をしよう。	◇追究に有用な情報を級友に説明したり，級友から新たな意見を得たりしながら，松山市への提言を多面的・多角的に考察し，表現することができる。（思考・判断・表現）	2

(6) 指導の工夫

前述の１の「研究の内容と方法」に即してその指導の工夫について述べる。

ア　問題解決的な学習の充実

生徒に広い視野から社会の形成者の一人としての自覚を持たせ，身近な地域の学習に主体的に取り組ませるために，生徒が興味や関心を持っている身近な地域の地理的事象を中心に追究課題を設定させることにした。その際，各々の生徒に「日本の諸地域」での学習で用いた「考察の仕方」を活用させ，「自然環境」や「産業」，「他地域との結びつき」などのいずれかの視点から地理的事象を見いださせ（**資料１**），その事象が見られる理由を調べさせた。こうしてそれぞれの生徒が得た追究成果を活かしながら本単元の学習問題「身近な地域のよさや課題を捉え，よりよい松山にするための提言をしよう」を解決させるために，共通する視点ごとに複数の小集団に分け，中核となる事象を多面的・多角的に追究させ，主題図や文章に表現させた（**資料２**）。そしてそこから地域的特色として地域の「よさ」や地域をよりよくするために改善すべき「課題」などを見いださせ，将来のまちづくりのための「提言」にまとめさせた（後述(7)授業の実際の**資料４**）。



4章　身近な地域の調査　１節～６節　地域を調べる

2年　　組　　番　名前

私たちの住むこのまちの、好きなところや興味をもっているところは？

・観光地　・みかん　・四国八十八ヶ所

地理的分野の学習で身に付けた地域を捉える視点や方法

自然環境（地形・気候）　他地域との結びつき（交通・通信）
環境問題・環境保全　産業（農業・工業・その他）
人口や都市・村落　生活・文化　歴史的背景
また、その変化　など

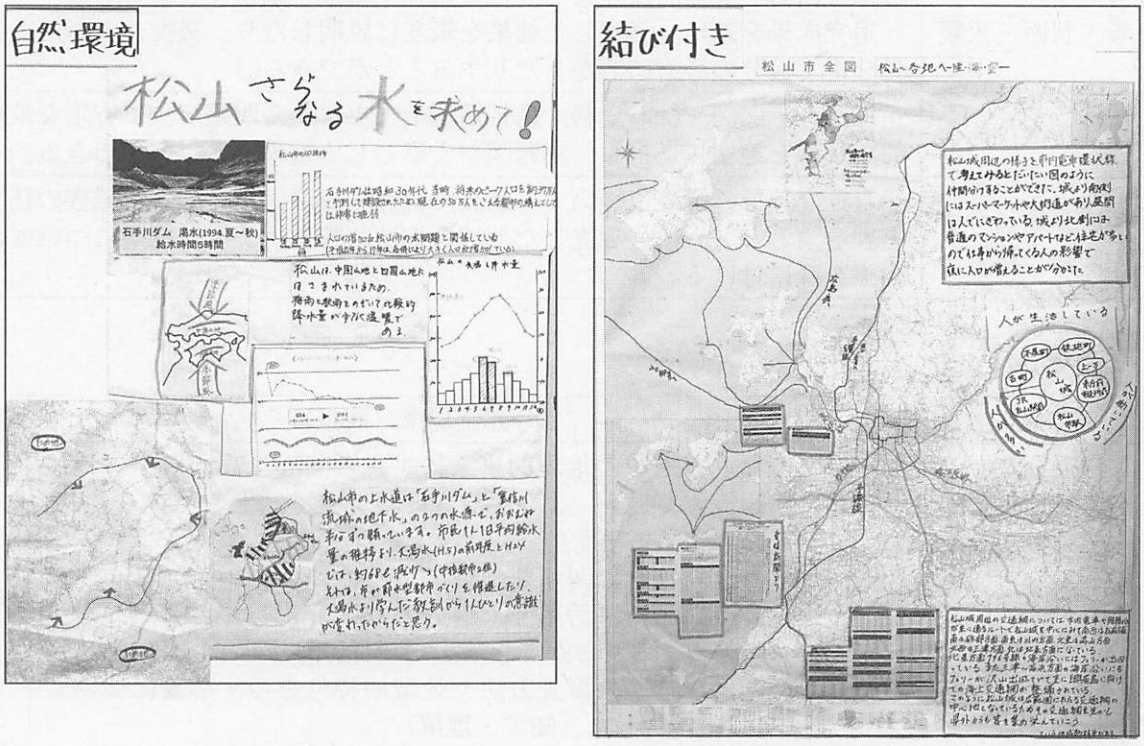
私たちの住むまちは…
何らかの視点を中心に、それを成り立たせている関連する視点を踏まえて説明すると…

[自然環境]の視点から見ると
みかんの生産が多い
という事象がみられる。

[観光地]の視点から見ると
観光客が減少している。
という事象がみられる。

[歴史]の視点から見ると
文化的観光地が多い
という事象がみられる。

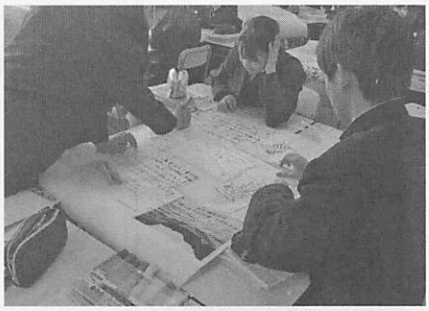
資料１　何らかの視点から地理的事象を見いだす



資料２　追究成果を主題図や文章で表現する

イ　生徒どうしの学び合いの充実

すべての生徒に協働学習者としてお互いの学びが活かされ合っていると感じさせるために，小集団での追究の視点から見た中核となる事象に有機的に関連付けられる「自己」の追究成果を考察に用いるよう促した（**資料３**）。また，各小集団で考えた「社会」への「提言」の実現可能性について，異なる視点から追究した「他者」の成果を持ち寄らせて，それを根拠にした意見を求めさせた。その際，付せん紙を用いて意見を交換させる場面を設定した。このようにして多様な視点から追究させる見方や考え方の広がる様子や追究成果が活用されている姿を可視化した。（後述(7)授業の実際）



資料３　「自己」の追究成果を「自己」及び同じ視点で追究する「他者」の学びに活かす姿

(7)　授業の実際（７／８時間）

ア　主題名

「身近な地域のよさや課題を捉えよう　～松山市への提言に向けて～」

イ　ねらい

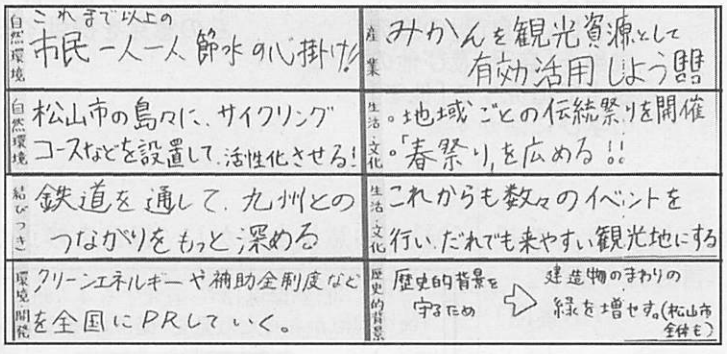
○小集団学習において，追究に有用な情報を級友に説明したり，級友から新たな意見を得たりしながら主体的に追究することができる。

○松山市への提言について広い視野から考察し，自分の言葉で表現することができる。

ウ　展　開

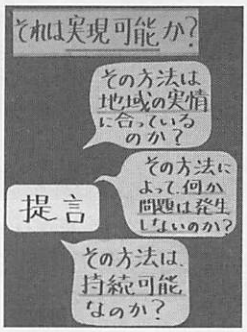
学習活動（形態）	○教師の働きかけ　・生徒の反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　本時の学習問題を確認する。（一斉）	松山市のまちづくり 「たからみがき」（今あるよさを活かす取組） 「タウンミーティング」（市民の声を市政に反映させる取組）	○身近な地域への興味・関心を高めるために，松山市のまちづくりを振り返らせた。
学習問題	身近な地域のよさや課題を捉え，よりよい松山にするための提言をしよう。	
2　班で見いだした身近な地域のよさや課題から考えた提言を発表する。（一斉）	○松山市の地域的特色から見いだした地域のよさや地域をよりよくするために改善すべき課題などから考えた，松山市への提言を発表しよう。	○地理的技能を身に付けさせるために，主題図などの資料を用いて表現させた。（**資料４**）
3　提言の実現可能性について話し合う。（小集団）	○班で考えた提言は実現可能なのか，他の視点で追究した級友の意見を聞こう。	**○「社会」の形成に活かせる提言にするために，地域の地理的事象と関**





資料４　視点ごとに小集団の追究成果を報告し，「社会」への提言を発表する姿

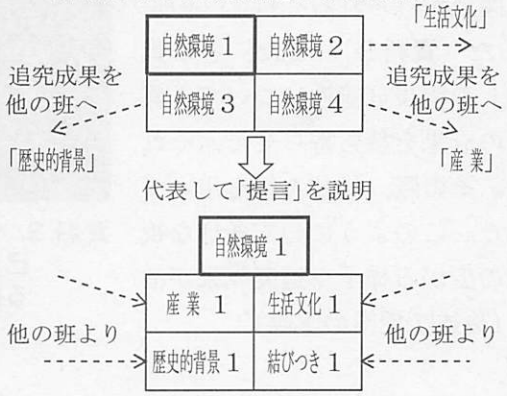
↓
（全体）
［協働］



資料５　持続可能性の検証のポイント

【小集団の動きの例】

「自然環境」から追究する４人班
（中核となる事象と関連する事象を調査）



代表して「提言」を説明

他の「視点」から追究した生徒が修正意見を述べる

連付けさせて検証させた。（資料５）［協働］

○広い視野から地理的事象を捉えさせ判断させるために，各自の視点の追究成果を持ち寄らせ，見方や考え方の多様性を可視化した。
［協働］

【話合いで出た生徒の意見】

「自然環境」の視点からの提言「島にサイクリングコースをつくろう」

《他の視点から追究した級友の意見》
- 費用はどうするのかなあ。無駄にならないかなあ。
- 道後温泉と島のみかんを結びつけた方がもっといいのでは。

「生活･文化」の視点からの提言「道後の景観を守るために緑を増やそう」

《他の視点から追究した級友の意見》
- 昔の景観も大切にされているが少し離れると今風。誰に求められているのかなあ。
- 住む人には不便。観光として求められているものとは別。それに費用は？

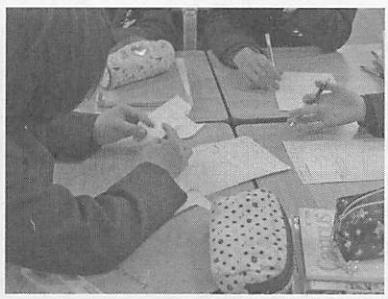
○お互いの学びの有用性を感じさせるために，付せん紙を用いて意見を交換させ，追究成果が活用されている様子を可視化した。
（資料６～８）
［協働］



資料６　自発的に資料の周りに集まり，質疑応答をし合い，「自己」の追究成果を「自己」及び他の視点で追究する「他者」の学びに活かす姿



資料７　「他者」の学びのために「自己」の追究成果からの意見を提供する姿

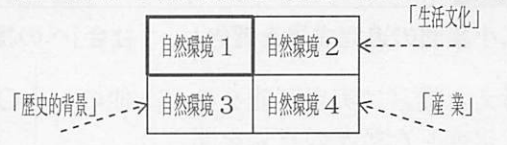


資料８　「他者」の学びから得た情報を「自己」の学びに活かし，「社会」への提言を考える姿

4　松山市への提言を練り直す。
（小集団）
↓
（個人）
↓
（全体）
［協働］

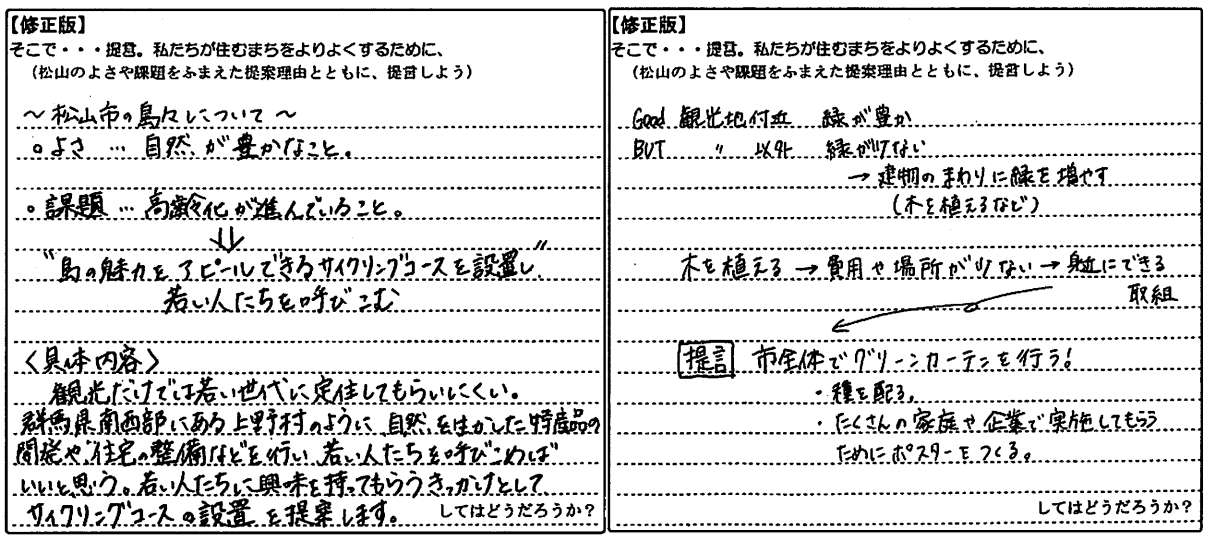
○級友の意見を活かし，提言を修正しよう。

「自然環境」から追究する４人班
（他の視点から得た意見を「提言」の修正に活かす）



（他の視点の班員との話合いの意見を持ち帰る）

◇追究に有用な情報を級友に説明したり，級友から新たな意見を得たりしながら，提言の実現可能性を多面的・多角的に考察し，自分の言葉で表現している。
（観察･ワークシートの記述）



資料９　修正され広い視野から練り直した「社会」への提言
（左「自然環境」の視点からの提言・右「生活・文化」の視点からの提言）

３　成果と課題

(1)　研究協議より

本研究実践における授業での研究協議において，参観者から次の意見を得た。

○身近な地域，普段感じている疑問からスタートする学習展開がスムーズであった。個人の調べ学習，そしてグループ学習と，より上へ学びの階段を登っている。

○自分の持つ情報に基づいた意見が言えていた。生徒の発表が慣れている。子どもたちの中から，「提言」の問題を問えていた。

○「多様な視点から……」について，この授業での小集団の持ち方で可視化できていた。

○自尊感情はねらいではなく，この取組の積み重ねで育つものではないだろうか。

○社会参画は「公」だけのものだろうか。身近な地域の調査＝市町村単位＝行政にやってもらおうという意識になっている。自分たちで取り組むことが大切なのではないだろうか。中学校の段階で，社会参画はどのレベルまで求めることができるのだろうか。

○社会参画は公民的分野での学習ではないだろうか。３年生での学習にどう活かすのだろうか。

○提言をよりクローズアップすることが弱かったかも知れない。クラスで一つにまとめる，集団として提言すべきでは。「全体でまとめる」＝「合意形成」が民主的であり社会参画につながるのではないだろうか。

○県外の人の声が参考になるのではないだろうか。どう見られているのか，どう結びついているのかなど焦点化することで課題が明らかになる。

○生徒自身の活動が松山市への「提言」という形で活かせており，見えやすくなっていた。提言の実現のために，どうすればよいのかという，リアルなところまで達していた。

(2)　研究の成果

ア　問題解決的な学習の充実

○生徒は積極的に調べ学習をしたり自発的に級友の追究成果を見に行き質問したりするなど，終始，意欲的に問題解決的な学習に取り組むことができていたことから，生徒の身近な地域への興味や関心から追究課題を設定させたことや，自分たちの住む「社会」の発展に資する「提言」をすることを学習問題にしたことは，生徒を社会的事象に主体的に向き合わせることに効果があった。

○地理的事象を多面的・多角的に見て「提言」をしていた（**資料９**）ことから，追究過程で中核となる事象に有機的に関連付けられる「他者」の追究成果や全く違う視点からの追究をした「他者」と意見交換をさせたことは，広い視野から判断させることにつながった。

イ　生徒どうしの学び合いの充実

○生徒一人一人が自分が設定した追究課題に対して概ね資料を作成することができたことから，「自己」の追究が小集団の「他者」の，さらには学級全体の学習問題の解決に必要であるという自己有用感を自覚させ，学習意欲を喚起し，自ら学び合うことにつながった。

○自分の追究成果やそこから得られた意見を臆せず積極的に伝えようとする姿が随所に見られたことから，お互いが協働学習者であることを意識させ，追究する姿やその成果，活用されている様子を可視化したことは，生徒の自尊感情を醸成することに効果があった。

(3)　今後の研究の方向性

本研究では，広い視野から社会を捉える態度を養うために，問題解決のために生徒に「自己」の追究課題を設けさせたり，その追究成果を「他者」と持ち寄らせたりするなど，「研究の内容と方法」ア・イを繰り返し，「きょうどう」を意識させた学習展開の工夫をした。その結果生徒は，「自己」の学びが「他者」の学びに欠かせないこと，言い換えれば互いに「他者」の学びが「自己」の学びを成長させていることを自覚し，自発的に情報交換をしたり質疑応答をしたりと，生徒たちが自ら「育つ」，まさに学び合う姿を示すようになっていた。また生徒は，「他者」の学びには「自己」の学びが不可欠であると感じる中で，「他者」を意識することでより「自己」をしっかりと意識し，自らを活かして行動できるようになり，お互いがより質の高い学びを目指すようにもなったと考える。

終わりに，社会科がねらいとしている『「社会」の形成に主体的に参画する態度を養う』ことを念頭において本実践単元の学習問題を「身近な地域のよさや課題を捉え，よりよい松山にするための提言をしよう」と設定した。単元の終末では個人で提言を考えることを「社会」に参画するという行動化，すなわち持続可能な「社会」の形成に参画しようとする態度の表れであると考えた。よって提言にも様々な追究成果を踏まえ，多面的・多角的に地理的事象を捉えていることが「広い視野」から捉えていることであると考えていた。これに対しては前述のように一定に成果があったと考える。しかし本当に大切な「広い視野」は，お互いが「他者」を意識し，「自己」と照らし合わせて持てる力を活用し合い，さらには尊重し合いながら合意形成をしていくために必要となる，「社会」の中の一人としての視野の広がりであることが分かった。今後は「自己」と「他者」が形成する「社会」に欠かせない「自己」を意識させ，しっかりと行動する生徒の育成に努めたい。

研究（その２）

社会のつながりが分かる社会科学習の展開

―歴史的分野「中世の日本」の実践より―

（実践者）田中　寿佳

１　研究テーマ設定の理由

社会にふみだす「知」を形成するためには，社会やそこに生きる人々の現状や問題を適切に捉えることが必要であると考える。そのために，漠然とでは見えにくい社会や人の営み，自分自身，またそれらのつながりや全体像を観るメガネとなる知識や概念，社会的な見方や考え方を身に付けさせたい。自分と異なる見方や考え方を持つ仲間との学び合いにより，見方や考え方が成長し，社会的事象間のつながりや時代の移り変わり，社会的事象の意味や意義が分かり，社会認識を確かなものにできると考え，本研究テーマを設定した。

２　研究の実際

(1)　研究の概要

歴史的分野の学習では，各時代の特色を明らかにした上で，歴史を大きく捉えさせることが求められている。一つの時代を特色づける核となるもの，言い換えると多くの社会的事象を貫く核となるものを通してその時代を見ていくことで，時代の特色が捉えやすくなるのではないかと考え，研究を重ねてきた。その中で，一つの時代の中でも核となるものの在り方は変容しており，その変容をつかんだ上で時代の特色を語ることが，時代の特色をよりダイナミックに捉えることにつながると考えるようになった。本実践は，中世の日本の特色を捉えるために，生徒が核であると見いだした「土地」と社会的事象との関わりやその変容を多面的・多角的に考察させ，時代の特色を自分の言葉で表現させたものである。

(2)　指導の工夫

ア　問題解決的な学習の充実

(ア)　単元を貫く学習問題と問いの設定の工夫
(イ)　身近な地域の歴史の学びを通して時代認識を深める取組

単元の始めに，中世のイメージを出させるとともに，年表で前後の時代と比較させ，「中世に戦いが多いのはなぜか」という課題意識を持たせる。また，古代から中世の転換を様子を捉える学習において，「土地」が武家政治においては重要なポイントであることに気付かせ，中世に戦いが多い理由を「土地」に着目して追究させることで，中世の特色を明らかしていこうという見通しを持たせるようにする。そのために，「戦い」と「土地」に関わる問いをいくつか設定し，その追究成果を時系列が分かるような１枚のワークシートにまとめさせることで，生徒が時代の特色を多面的・多角的に考察できるようにする。

また，問いの一つに地元松山の豪族であった河野氏に関するものを設定する。中世の始まりとともに表舞台に登場し，中央政権との関係や戦いの勝敗によって繁栄と衰退を繰り返し，中世の終わりとともにその終焉を迎えた河野氏は，中世という時代の一つの特色を体現しているといえる。その河野氏の歴史を中央の動向と関連付けて追究させることで，地域の歴史への関心を高めるとともに，中世の歴史の動きを理解させることができ，中世の特色の一面を明らかにできると考える。

イ　生徒どうしの学び合いの充実

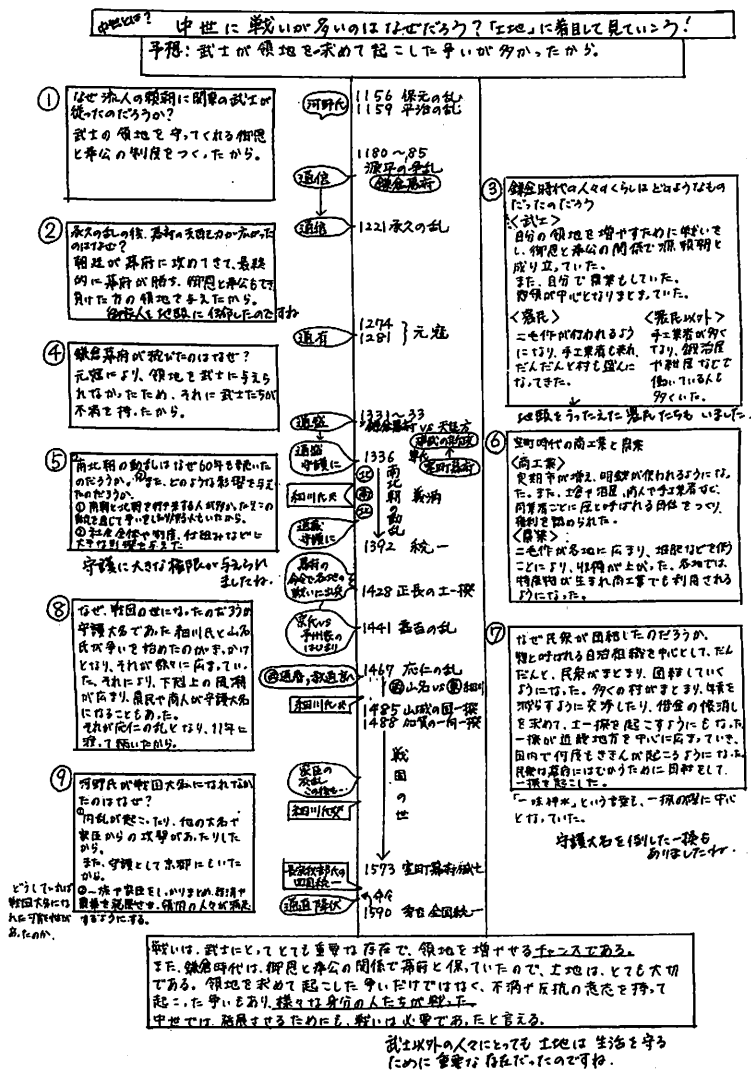
(ア)　協働の精神を発揮する話合いの手立ての工夫
(イ)　事象間のつながりや仲間とのつながりを可視化する工夫

全体の場では発言しにくくても，「班活動では自分の考えを伝えることができる」と88％の生徒が答えている実態を踏まえ，小集団での話合いによって単元の学習活動に迫っていく。４人班を編制し，協働の精神を発揮しやすくするために，一人一人に異なる視点を担当させ，そのすべてとつながる中世の特色を表現させるようにする。班内にその視点を担当するのは自分だけであるという責任感を持って自分の考えを仲間に伝え，それが時代の特色を見いだす上で不可欠であることを実感することで自己有用感を高めたい。

また，自分が担当した視点から見いだした事象と他者が見いだした事象にどのような関連性があるかをホワイトボード上に可視化することで，事象間のつながりや仲間とつながりが実感できると考える。また，「土地」の在り方についての多面的・多角的な考察を促し，時代の特色を総合的に捉えることができるであろう。自己の学びが他者の学びとつながることが，社会のつながりを見いだすことになると考える。

３　授業の実際

(1)　単元を見通すワークシート



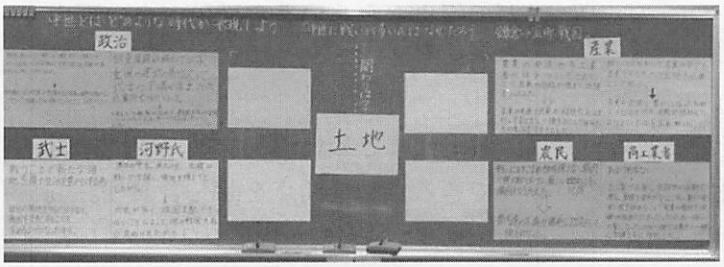
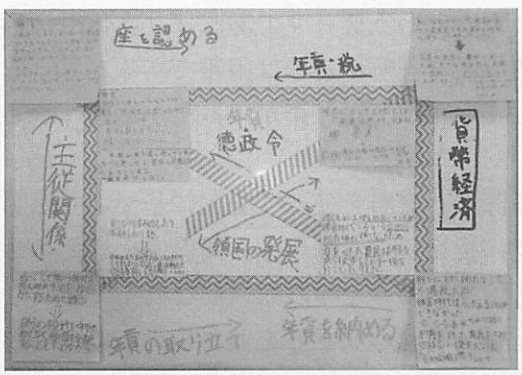
問い
①なぜ流人の頼朝に関東の武士が従ったのだろうか？
②承久の乱の後，幕府の支配力が広がったのはなぜ？
③鎌倉時代の人々の生活はどのようなものだったのだろう。
④鎌倉幕府が滅びたのはなぜ？
⑤なぜ南北朝の動乱は60年も続いたのだろうか。
⑥室町時代に産業はどのように変化したのだろう。
⑦なぜ民衆は団結したのだろうか。
⑧なぜ戦国の世になったのだろうか。
⑨河野氏が戦国大名になれなかったのはなぜ？どうしていれば戦国大名になれる可能性があったのだろう。

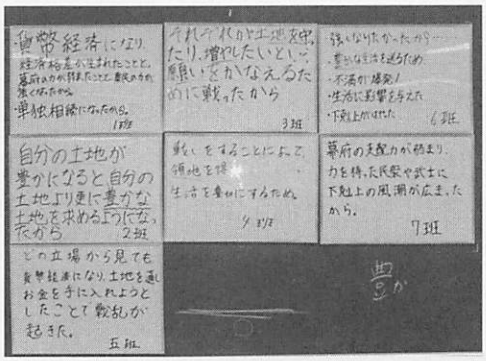
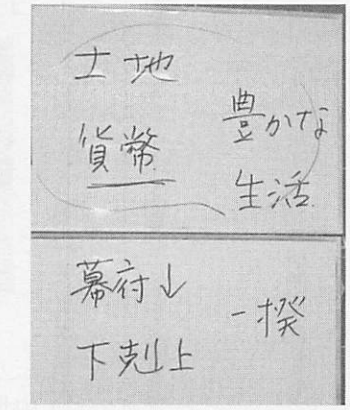
(1) 中世のまとめの授業の実践

ア ねらい

中世の特色を多面的・多角的に考察し，土地を通して見た中世の全体像や時代の脈絡が分かるような自分の言葉で表現する。

イ 展 開

学習活動（形態）	時間	○教師のはたらきかけ　•生徒の反応	○指導の工夫　◇評価
1　六つの視点からそれぞれまとめた中世が多い理由を確認する。（一斉）	3	○「政治」「武士」「河野氏」「産業」「農民」「商工業者」の視点から考えた戦いが多い理由は？ • 鎌倉→室町・戦国の変化を意識してまとめている。  各視点から考えた戦いが多い理由を提示する 中世とはどのような時代か表現しよう	○効率的に確認させるため，前時までの学習成果を黒板に提示させておいた。
2　四つの視点からの理由と「土地」との関わりを伝え合う。 **【協働】**（班）	6	○自分が担当した視点からの理由が「土地」とどのように関わっているのか伝え合おう。 • 「武士」……戦いで活躍して与えられるものから，実力で奪い取るものになった。　など	**○協働の精神を発揮させるため，班の一人一人に違った視点を担当させ，考えをまとめた付せん紙や資料を使って伝えさせた。** **【協働】**
3　四つの視点からの理由が「土地」を通してどのようにつながっているのかを検証する。 **【協同】**（班）	7	○それぞれの視点からの理由が「土地」を通してどのようにつながっているかを考え，つながりを示していこう。  各視点のつながりをホワイトボード上に可視化する	**○自分の学びが他者の学びとつながっていることや話合いに活かされていることが実感できるように，かつ多面的・多角的な思考の助けとなるように，付せん紙やそれをつなぐ線を示したホワイトボードを活用して，つながりを可視化させた。** **【協同】**

4　中世に戦いが多い理由を一つにまとめる。 **【協同】**（班）	15	○中世に戦いが多い理由を四つのどの視点からも納得できるようにまとめてみよう。  **どの視点からもいえる戦いが多い理由をまとめる**	◇多面的・多角的に考察し，どの視点にも当てはまる理由を見いだして表現している。 （観察・ホワイトボードの記述）
5　各班がまとめた理由を発表し，それを基に意見交換をする。　（全体）	14	○各班がまとめた理由を聞いて，納得できる点や疑問点を話し合おう。 • 中世は土地が豊かさにつながっていた • 土地が貨幣を生み出すようになった • 幕府の力が衰えると戦いが多くなる	話合いで多く出たポイントとなるワード 
6　中世の特色を自分の言葉でまとめる。 （個人）	5	○これまでの活動を踏まえ，中世とはどのような時代か自分の言葉で表現してみよう。 • 豊かな生活を求めて団結した時代 • 自分たちで治める動きが見られた時代 • 幕府の支配力が弱まり，武士や民衆がそれぞれの願いを叶えようとした時代	◇中世の全体像や脈略が分かるような自分の言葉で表現している。 （発表内容・ワークシートの記述）

ウ　研究協議の内容

○四つの視点が「政治」「産業」の面と「武士」「農民」などの立場が混在しており，分かりにくかった。

○中世とはどのような時代であったかというテーマであれば，文化や宗教が出てこないのは違和感がある。それを抜きに時代の特徴を理解するのは困難であると考える。

○四つの視点を教師側から提示していたが，誰と誰が戦ったかを調べさせた上で生徒に視点を出させてもよいのではないか。

○生徒に自分の考えを伝えさせる際に，資料を使って史実に基づいて説明させるべきである。

○さまざまな歴史事象をバラバラに捉えるのではなく，関係性を考えさせることで中世社会とはどのような時代であったかを理解させようとする意欲的な授業であった。

○「班田収授法」「墾田永年私財法」「荘園の成立」を並べ替えるような問題に対応できる取組である。知識のつながりがあると忘れにくい。

○授業の最後に生徒たちが時代の特色を語った言葉を聞くと，生徒たちはもやもやしながらも，本質をつかんでいるのだと感心した。

4　生徒の自己評価

単元の学習前のアンケートで「自分の考えや活動が友達の学びの役にたっているか」の項目で，4段階のうち「2」「1」と答えた生徒の学習後の評価と主な記述内容は以下の通りである。

生徒	評価の変容	学習後の主な記述内容
A	1→3	• 友だちの意見を聞くことができ，自分の意見も言うことができた。
B	2→2	• 自分が見れていなかった視点を他の人たちが見ていて，その意見を取り入れることで，新たな発見，発想ができた。 • 中世は戦いが多いだけではなく，人々の団結，協力性などさまざまな事でなり立っている時代だと思った。ただ戦いが多いだけではなかった。
C	2→3	• （自分に任された視点があることで）しっかりと説明できるようにいろいろなことを聞き，メモをした。
D	2→3	• （中世に戦いが多いのは）予想では身を守るためだったけど，（学習後に）考えてみると，幕府の政治が不安で身を守るというより，自分たちの暮らしを守るためだったと思う。 • 中世のことについて，班で考えていくのがとても楽しかったし，仲間のことがよく分かりました。
E	2→4	• （任された視点があることで，変わったことは）ない。 • 最初は薄っぺらい考えだったけど，みんなで話し合い，ぶあつい考えを持つことができました。
F	2→4	• （学習前は）土地への欲望が大きくて，戦いが多いのだと思っていました。（学習後は）中世は，人々が豊かな生活を願い争った時代としました。 • 簡単そうで難しい問題を考える時，話合い活動は本当に良かったです。 • 僕は，歴史は苦手でしたが，好きになった気がしました。歴史は分かると，とてもうれしいし，楽しいです。
G	2→4	• 自分の視点を班員に伝えるとき，手助けしてくれる人がいないため，責任を持って話合いに参加することができた。自分の考えがうまく伝えられたとき，うれしかった。 • 学習の中でキーワードとなる言葉を見つめていくとより詳しく，中世に戦いが多かった理由が見えてきました。理解するまでに時間はかかったけれど，最後に自分の答えを書くことができたので良かったです。

4　研究の成果と課題

(1)　問題解決的な学習の充実について

(ア)　単元を貫く学習問題と問いの設定の工夫
(イ)　身近な地域の歴史の学びを通して時代認識を深める取組

中世はどのような時代かを追究していく学習において，単元を貫く学習問題を設定し，「戦い」と「土地」に焦点を当てた問いを積み重ねていくよう単元を構成した。そして，問いの追究成果を時系列が分かるような1枚のワークシートにまとめさせ，生徒がそれを活用して多角的・多面的に考察し，導いた学習問題の答えを自分の言葉で表現させるようにした。「武士」だけではなく「民衆」も戦ったことや，中央政権の弱体や産業の発展との関係，自治や団結，自力救済の考えを踏まえた記述が多く見られるようになっていた。ある生徒は感想に，「同じ中世でも土地の在り方や戦いの意味など変化していくものが数多く学んでいて楽しかった。いろんな身分の人たちがそれぞれに生き抜くために団結するのは，今とあまり変わらないと思いました」と書いており，「戦い」と「土地」を通して時代の変容を捉えることができていた。

また，問いの一つに河野氏に関するものを設定し，その歴史を学ばせることで，政権に携わる者や勝者の側からだけでなく，それらとの関わりに翻弄されながらも中世を生き抜いた地方の武士の側からも多角的に中世という時代の特色を考察させることができた。また，自分たちが住む地域にも確かに中世を生きた人々がいることを感じさせるとともに，中央政権との関わりを背景とする戦いの結果と領地の増減，守護の権限拡大や領国支配などの歴史的事象の具体的な理解にもつながった。

各問いを追究する過程においては，教師が知識を教えたり，教師主導で資料を読み取らせたりした上で，問いの答えを生徒にまとめさせることを積み重ねてきた。特に「なぜ」という問いに対しては，生徒に考えを出し合わせて導きたいと考えていたが，この答えがある程度教師が求めるレベルに達していなければ時代の特色にうまくたどり着かないとの思いから任せきることができなかったと反省する。学習のまとめの授業では，これらの問いの答えを活用して自分の視点からの意見を持たせて話合いに臨ませることができたため，班での話合いや中世の特色を自分の言葉で表現する場面では，ある程度は「任せ・きる」ことができた。しかし，各問いの答えが自分たちで導いたといえるものであれば，生徒が時代の特色についてももっと「自分ごと」として追究することができたのではないかと考える。

(2) 生徒どうしの学び合いの充実について

(ア) 協働の精神を発揮する話合いの手立ての工夫
(イ) 事象間のつながりや仲間とのつながりを可視化する工夫

約８割の生徒に班員の中で自分だけに割り当てられた視点があったことで，そうではない話合いと比べて変化があったと答えた。その記述を分析すると，「自分の任されたことに責任感を持って調べたり考えを持って話合いに臨んだ」「分かりやすく伝えることを意識して説明した」という内容が多かった。ある生徒は「(任された視点がないときは) 同じ人がずっとしゃべっている感じだったけど，一人一人任務があって，自分の意見を持って話合いに臨むことで，みんなで話合いが本当の意味でできたと思う」と記述していた。

班員４人がそれぞれ担当した視点から見いだした事象を付せん紙に記入してホワイトボードの四角に貼って線で結び，それぞれにどのような関連性があるかを書き込ませることで，事象間や各自の学びがどのようにつながっているかを可視化させた。その結果，「人のと自分のがつながった」「たくさんのつながりが見えた」ことで「視野が広がった」「多数の視点から中世を捉えられるようになった」と考えられる。

生徒一人一人が自分だけの役割を持って話合いに臨むことや互いの学びを可視化することは，協働の精神を発揮しやすくする手立てとして有効であり，主体的に自分の考えを表現し，伝えようとしたり，広い視野で物事を判断しようとしたりする力が育つことになると考える。

単元の学習前のアンケートで「自分の考えや活動が友だちの学びの役にたっているか」の項目が，４段階のうち「２」「１」で自己有用感が低かった７人中６人は，授業後に評価が向上していた。また，「４」だった生徒はそのままで，「３」だった生徒も12名中10名が「４」とした。また，単元の最初に予想した中世に戦いが多い理由と学習の最後にまとめた理由を比べさせると，全員の生徒が視野が広がったり，考えが深まったりしていることを実感することができていた。昨年度の研究の反省点であった「できる子がいたからできたのであって，すべての生徒の自己有用感を高められなかった」という点は少し改善できたように思う。しかし，それは生徒の自己評価を基にしており，また，班の中では自分の考えを伝えられても全体の場でできる生徒は多くない。客観的な評価の在り方や汎用性のある自尊感情を醸成することを研究していく必要がある。

研究（その３）

社会が「分かる」社会科学習の展開

―歴史的分野「江戸幕府の政治を評価しよう」の実践より―

（実践者）宮本　真人

１　研究テーマ設定の理由

「過去」のできごとを扱う歴史的分野の学習において，「現在」と「将来」の視点を軸にして論じられる「持続可能な社会」の形成に資するためには，「過去の事実の分析や解釈を通して現代の社会の特色を認識し，それを基に未来社会を予見し構想できる力」が育つ授業展開が大切だと考える。本研究ではこの力を「社会にふみだす知」とし，これを育成するため，次に掲げた学習の充実を図ることとした。

○歴史上の価値相対的な課題について思考・判断・表現することを通して，歴史の大きな動きや現代の社会の特色が「分かる」歴史的分野の学習

歴史とは，その時点・その場面ごとの人々の思考や判断に基づく行動の蓄積である。したがって，過去の社会を真に理解するためには，生徒がその時代に身を置き，当時の価値相対的な課題について，主体的に思考・判断し，互いに表現し合うことが必要である。また，このことによって得た理解は，現代認識や未来構想に活きる活用性を持ったものになると考える。このような未来に向けた判断力や行動力が育つことを意図した，過去，及び，現代の社会の特色が「分かる」学習の積み重ねは，望ましい子ども像に掲げた「真理を求める探究心」につながるものであると考え，本研究テーマを設定した。このことを具現化するために，『きょうどう』の精神を発揮する学習活動の展開を念頭に，次の点を「研究の内容と方法」とし研究実践を進めた。

(1)　問題解決的な学習の充実
　ア　各時代の特色への理解や現代認識，及び，未来構想に活きる学習内容の研究・吟味
　イ　主体的に追究し，知識や概念を転移性のあるものに拡大する学習指導方法の工夫
(2)　生徒どうしの学び合いの充実
　ア　すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫
　イ　他者からの学びを促進する手立ての工夫

２　研究の実際

(1)　概　要

本実践は，次の目標，指導計画で構成された単元「危機が生んだ幕府の政治改革」（全５時間）での実践である。

単元目標

観　点	目　　標
社会的事象への関心・意欲・態度	江戸時代後半（18世紀～19世紀半ば）の我が国の社会の変動と幕府の政治改革に対する関心を高め，単元を貫く学習問題「なぜ，江戸幕府は，政治改革をしなければならなかったのか」を意欲的に追究しようとする。
社会的な思考・判断・表現	江戸時代後半の社会情勢と幕府政治の動きを関連付けて捉え，幕府の政治改革について多面的・多角的に考察し，公正に判断して，自分の考えを表現できる。

資料活用の技能	江戸幕府の政治改革の特色とその社会背景を捉えるのに適した資料を選択して，有用な情報を読み取ったり，図表などにまとめたりすることができる。
社会的事象についての知識・理解	江戸時代後半の社会の変動や欧米諸国の接近，幕府の政治改革の動きなどを通して，幕府の政治が次第に行き詰まっていったことを理解し，その知識を身に付ける。

指導計画（全５時間）

次	学習内容	◇評価規準（観点）	時間
1	○享保の改革と社会の変化	◇享保の改革が必要になった理由を，貨幣経済の広がりなどから考察し，説明している。（思考・判断・表現） ◇江戸時代の人口のグラフと米価とを関連付け，米の生産量が増加しても幕府の財政難解消が困難であったこと読み取っている。（資料活用）	2
2	○田沼の政治 ○寛政の改革	◇田沼意次の政治と松平定信の政治を比較し，目的や内容などについて，その概要と特色を理解している。（知識・理解） ◇二つの政治改革の特色を踏まえた上で，江戸幕府の政治改革について，根拠を示して自分の考えを記述している。（思考・判断・表現）	2
3	○天保の改革と外国船の来航	◇社会の動向と天保の改革とを関連付け，幕府政治の動向に対する関心を高めている。（関心・意欲・態度）	1

(2) 指導の工夫の設定

ア 問題解決的な学習の充実

(ア) 各時代の特色への理解や現代認識，及び，未来構想に活きる学習内容の研究・吟味

単元「危機が生んだ幕府の政治改革」で学習する江戸時代後半は，新田開発と城下町の建設とが一段落し，いわゆる「停滞の時代」となる。この時期，幕府は財政難の克服に腐心し，三度の政治改革において，農業を重視して幕府財政の安定を目指す。しかし，米を基盤とする年貢収入に依存する限り，幕府の収入は安定的に増加しないという社会構造が生じており，これを背景に幕府の政治は不安定化の一途をたどる。

現代社会においても財政の再建・健全化は往々にして大きな政治課題・目標に位置付けられる。その目的は，社会経済の変化に合わせてしくみを変えながら，持続可能な国民福祉を提供し続けることにある。しかし，これは賢明な国民と賢明な政府でなければ実現できない。本単元の意義はここにある。近代的な人権意識もほとんどなく，天変地異に対しても現代よりももっと無力であった江戸時代に，幕府はどのように「公」を構想し，どのように社会経済の変化に対処しようとしたのか。また，国家による安全と生活の保障がほとんどなかったこの時代に，人々は自らの命や生活をどのように守ろうとしたのか。そして，それらが関係し合って，どのような社会が形成されていったのか。本単元において，これらのことを追究させていくことにより，本研究テーマ設定の理由で述べた「過去の事実の分析や解釈を通して現代の社会の特色を認識し，それを基に未来社会を予見し構想できる力」が育つと考えた。

これを具現化するため，本単元では，単元を貫く学習問題「なぜ，江戸幕府は，政治改革をしなければならなかったのか」を追究させ，毎次ごとに思考・判断したことを自分の言葉で表現させていった。それら毎次の表現を集約して，単元の終末で再度学習問題について記述させ，江戸時代後半期がどのような時代状況を形成していたのか十分に「分かった」かどうかを評価することとした。とりわけ本実践では「江戸幕府の政治を評価する」ことを通して，持続可能な社会の形成に資する政治に関する社会的な見方や考え方を広げ深めるとともに，「真理を求める探究心」

（望ましい生徒像）につながる，広い視野で物事を客観的に判断する力（自立の力）や公正な社会を築こうとする力（共生の力）が育つと考えた。

(イ) 主体的に追究し，知識や概念を転移性のあるものに拡大する学習指導方法の工夫

本単元での学習が「過去を学ぶことで現代の社会が理解でき，未来社会の構想が促される学習」となるよう，毎時間の学習で扱う歴史と結び付く「現代の社会的事象」を取り上げた。例えば，「田沼意次の政治を評価しよう」の実践では，住民投票の結果によって地方行政の政策が決定された事例や18歳選挙権の話題を活用した。この事象の活用は，生徒が「自分ごと」として主体的に教材や問いと向き合えることにもつながると考えた。また，問いや学習展開については，「教えて考えさせる授業」（市川伸一氏）で提唱される学習過程を参考にし，当時の社会の状況や幕府政治の要点を捉えるための問い①（理解確認課題），江戸幕府の政治政策を思考・判断する問い②（理解深化課題）を柱に授業を構成した。さらに終末場面では，授業で学んだ過去と今に生きる生徒自身をつなぐ問い③を思考させた。以下は「田沼意次の政治を評価しよう」での問い①～③である。

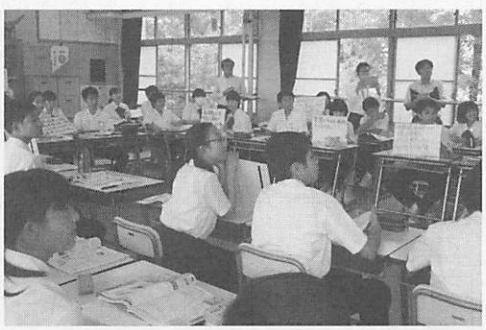
問い①：「田沼の政治をキーワードで表してみよう」（理解確認課題）
問い②：「田沼の政治は成功か？それとも，失敗か？」（理解深化課題）
問い③：「田沼の政治や当時の社会を，今，私たちが学ぶ意義は何だろう」（振り返りの問い）

問い①はいわば田沼意次の政策への理解を確認するための問いであり，問い②は問い①を通して，理解したことを活用し，深化させるための問いである。問い①によりすべての生徒に基礎的・基本的な知識や概念を習得させ，問い②の追究の中でそれを活用して，思考・判断・表現することを通して，習得した知識や概念が転移性のあるものに育つと考えた。また，本時の終末場面における問い③において，本時の学びを振り返らせることにより，さらにその育ちを促進させようと考えた。

イ　生徒どうしの学び合いの充実

(ア) すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫

生徒が互いに顔を見合いながら，また，それぞれの思考の状況を確認し合いながら，学習が進められるよう，授業の前半部はコの字型の座席配置による全体学習を中心に進めた。その際，適宜ペア学習を取り入れ，互いの意見を聞き合いながらペアの考えを練り合い，発表する場面を設けた。授業の後半部では，問い②について，グループで練り合い高め合う場面を設けた。各自の考えを基にしてグループ学習を進めさせることにより，すべての生徒が各自の考えを広げたり深めたりできると考えた。



コの字型の座席配置

コの字型の座席配置やペア及びグループ学習の最大の利点は，言語情報のみならず非言語情報（表情やしぐさなど）をも，互いにリアルタイムで確認し合いながら生徒の学び合いがなされる点にある。自分の思考・判断の過程や成果が，他者にどのように伝わっているのかをリアルタイムで認識できる状況での学びこそが，自尊感情を醸成し合う「きょうどう」の精神を発揮する学びには欠かせないものであると考える。

(イ) 他者からの学びを促進する手立ての工夫

問い①の追究場面においては，当時の社会状況や幕府の政治政策について理解している生徒が，理解が不十分な生徒に対して，納得するように工夫して説明させたり，理解が不十分な生徒が，何とか理解しようという意識で他者の説明を聞かせたりといった，「共同」の精神を発揮する学

びを構成した。

問い②の追究場面においては，お互いに納得するまで話し合わせる中で，政治についての見方や考え方がより社会的に育つことを意図して「協同」の学びを構成した。具体的には，本実践における「共同」の精神を発揮する学びとは，共に同じ結論に至るよう努力し合う学び合いであり，史実から得られる妥当な歴史認識を，生徒全員が自分のものにする過程における学びのことを指し，「協同」の精神を発揮する学びとは，他者と協力して自分も相手も納得できる最善解を導き出す過程における学びを指す。

これらにおいては，色分けした意見カードやホワイトボードを活用して，個人やペアでまとめた意見を，適宜小集団や全体に提示させながら学習を進めた。これにより，時間を多くかけずに，多様な考えに触れさせることができ，「きょうどう」の学びが促進されると考えたからである。問い①・②についての各自の考えは，ワークシートに書かせた後に，ペアや小集団学習の際に，根拠を示しながら発表させるようにした。他者との異同がより明確になり，各自の「考えの根拠」を互いに吟味し合い，そのことにより，学び合いが促進させると考えたからである。また，そこでの知識の確実な習得及び見方や考え方の成長は，問い③にてそれを実感させることにより，自尊感情の醸成に資することができると考えた。

3　授業の実際（全５時間のうちの３時間目）

(1) **主　題**　　田沼意次の政治を評価しよう

(2) **ねらい**

○田沼の政治が重商主義的な政策を行ったことを理解する。

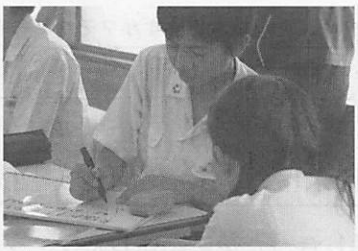
○当時の社会状況を踏まえて田沼の政治に対する自分の評価を表現する。

(3) **展　開**

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ・生徒の主な反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　政治について判断することの大切さを知る。 （一斉）	3	○なぜ政治についてしっかりと判断することが大切なのか。 ・国民の投票行動によって政治の在り方が決定するから。	○本時の学習意欲を高めるため大阪市の住民投票の結果や18歳選挙権について新聞記事等を活用して説明した。
2　田沼の政策を確認する。 （一斉）	5	○田沼意次はどんな政策を実施したのか。 ・株仲間の奨励　・印旛沼の干拓 ・長崎貿易の活性化　など	○学習の見通しをもたせるため，問い①を予告して田沼の政治の具体について説明した。
問い① 理解確認課題	田沼の政治のキーワードを次から選び選んだ理由を説明しよう。 「農業の重視」・「商工業の重視」・「身分制の強化」・「質素・倹約」		
3　問い①について考察し学級全体で結論を導く。 **【共同】** （個人） →（ペア） →（全体）	10	「商工業の重視」 ・貿易を活性化したり株仲間を奨励し，そこから営業税を取るようにしたから。 ・年貢米に依存する財政基盤から脱却しようとした政策が多いから。	○田沼の政治をキーワードで表現させたりホワイトボードやコの字型の座席の利点を活かしたりしてすべての生徒の理解状況を効率的に把握できるようにした。 **○田沼の政治政策の意図を全員が納得できるよう適切な資料を見出させホワイトボード等を活用させながら他者が納得できるよう説明させた。　【共同】**



ホワイトボードによる理解確認



「共同」の精神を発揮する学び

◇複数の事例を根拠に田沼の政治のキーワードを「商工業の重視」としている。
（ホワイトボードの記述確認）

問い② 理解深化課題	田沼意次の政治は成功か？それとも失敗か？

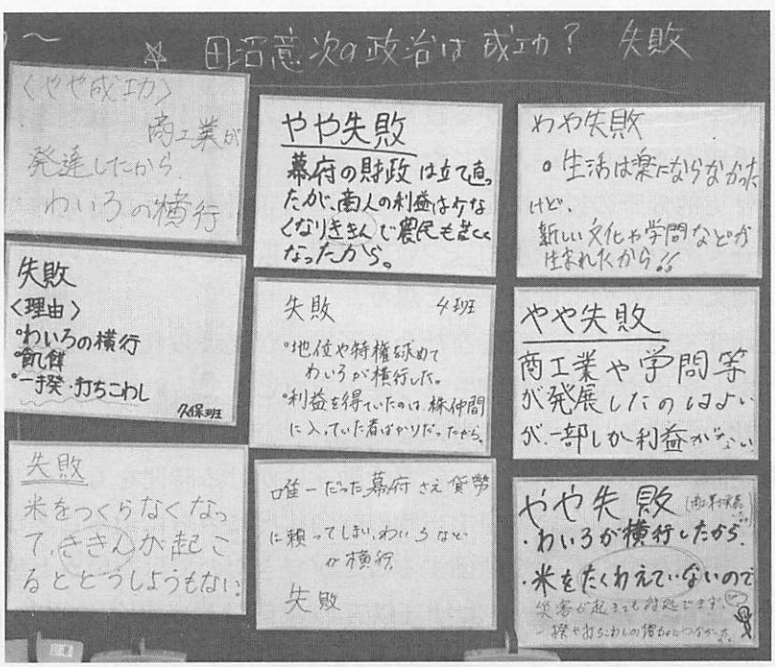
4　問い②について判断したことをもとに話し合う。　**【協同】** （個人） ↓ （小集団） ↓ （全体）	22	＜成功＞ • 商工業は活発になっているので財政難の克服という点では成功 • 学問や芸術が発展するのは社会が安定した証だから成功 ＜失敗＞ • 百姓一揆や打ちこわしが増加したので失敗 • 農村への救済策がなく農村は荒廃したので失敗 • ききんに対応する策を講じられなかったので失敗	○個人の意見を反映させながら小集団での学び合いを充実させるため，意見カード等を活用し，各自の判断を可視化した。 **○生徒からより多様な考えを引きだすため，「やや成功（失敗）」との立場を含めた判断をさせ，班でまとめさせた。　【協同】** ◇当時の社会状況を踏まえたうえで，問い②について公正に判断し，自分の考えを史実に基づいて説明している。 （意見カードの記述分析）



意見カードによる意思表示



「協同」の精神を発揮する学び



問②についての各班の判断

※学級全体で「成功」であったか「失敗」であったかについて話し合わせた後，さらに「あなたが将軍なら田沼意次をやめさせたか？」を思考させ最終判断とした。

【最終判断】あなたが当時の将軍なら、田沼意次をやめさせますか？それとも老中を続けさせますか？

やめさせる　・　(続けさせる)

なぜなら… 今、田沼意次をやめさせて新たな老中をつくっても、この天明の大ききんの前では何も出来なかったと思うし、政治は実際回復に向かっていたから。

「成功」か「失敗」かを話し合った後に記述したワークシート「最終判断」

問い③ 振り返りの問い	田沼意次の時代を私たちが学ぶ意義は何だろうか。		
5　問い③を考察し本時の学びを振り返る。 （個人）	10	• 政治について様々な立場を踏まえて判断することが重要である。 • 長い目で見て，今の政治の在り方を判断する必要がある。	○本時の学びが現代の社会への理解につながるよう，また自己の成長を認知できるよう振り返りシートを工夫した。

田沼の政治や当時の社会を、今、私たちが学ぶ意義は何だろう？（田沼の時代から何を学ぶべきか？）

古きをたずねて新しきを知る，温故知新，という言葉もある通り，今の時代を生きてゆく一人の人間として，生物として難しい，正解がないような判断を自分で下す能力を養うこと。

学習活動５でのワークシート

４　成果と課題（全５時間のうちの３時間目を中心に考察）

(1)　問題解決的な学習の充実

ア　授業参観者より（○成果につながる意見　●課題につながる意見）

○田沼意次の政治を一人一人の生徒が自分なりに評価するという言語活動の充実を図った非常に興味の持てる授業であった。

○「教えて考えさせる」授業展開が効果的になされており田沼意次の政策を通して当時の社会状況や時代像がよく分かる授業であった。生徒が自ら疑問を持って考え，互いに説明し合う授業構成が素晴らしいと感じた。

○歴史的分野の授業において社会参画の手掛かりとなる見方や考え方を得ることのできる授業内容であった。今後政治について興味・関心を持ち，広い視野からそれを捉えようとする生徒が増えていくのではないかと思う。

○研究主題に「持続可能な社会の形成」が掲げられているが，田沼の政治について「成功か失敗か」を班や全体で吟味させる際の視点としてそれが含まれていた。ＥＳＤを踏まえた歴史的分野の学習として大変参考になった。

●発問数が多いと感じた。学習活動４にかける時間をもう少し増やすことができたならば生徒どうしの関わり合いの中で当時の社会状況にさらに迫ることができたと思うし，より広い視野から田沼意次の政治を評価することができたのではないかと感じた。

イ　生徒のアンケートより（以下の数値は生徒40名の平均値を示す。５段階評価最高値５）

項目①自ら意欲をもって積極的に取り組んだ。(4.72)
項目②とても興味の引く教材であった。(4.65)
項目③田沼意次が政治を担当したころの様子がだいたい分かった。(4.59)
項目④今日の授業から私たちの社会に活かすべきことが見いだせた。(4.57)
※項目①～④において評価を「２」以下とした生徒はいなかった。

ウ　考　察

参観者の意見，生徒アンケート及びワークシートの記述から「当時の社会が分かる授業展開」「未来社会を構想できる力の育成」の両方を具現化することについては本実践で設定した指導の工夫には一定の効果があったと判断する。「すべての生徒が伸びる」という観点からも同様のことが言えると判断している。しかし本実践の生徒の判断について当時の社会状況を踏まえたものがもっと多く出ても良かったと感じている。結論を見ての判断や固定観念からくる判断，教科書の記述のみからの判断もあり，特に教科書の記述を「読み取る」ことによってのみ行われた判断にはもう少し突っ込んだ切り返しの問いかけが必要だったと反省している。「田沼はやめさせられました」「わいろが横行しました」「ききんが起こり一揆や打ちこわしが増えました」，これらの教科書の記述から田沼の政治政策を失敗だったと判断した生徒には「なぜそれを理由にすることで失敗だったと言えるのか」をもっとしっかりと説明させる必要があったと考える。本校の研究主題に関わる持続可能性への思考を育む観点から言えば「当時のそのときどきの生活を豊かにすることよりも先を見越してその時我慢を強いられるにもかかわらずききんに備えるほうが本当に重要だったのか」との切り返しの問いが不可欠であった。

持続可能な社会の形成に資する歴史的分野の授業をさらにより良いものにしていくため，これらの成果と課題を踏まえ教師の教材開発力やコーディネート力を高めなければならないと痛感している。

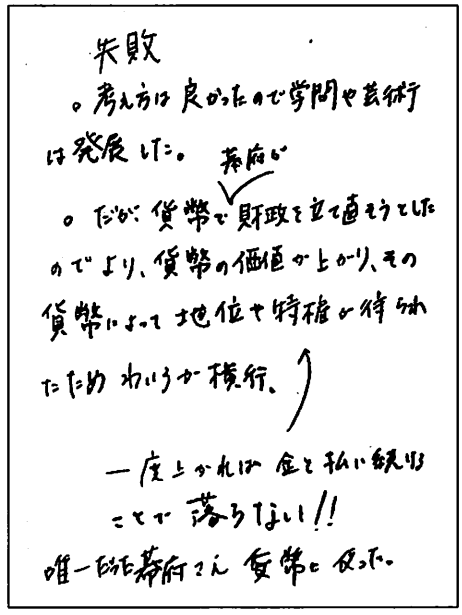
(2)　生徒どうしの学び合いの充実

ア　授業参観者より

○ＩＣＴや意思表示用のミニホワイトボード，意見カード（P70，71参照：田沼の政治が成功だった…黄色，田沼の政治が失敗だった…青色）の活用の工夫等々，言語活動の充実に関わる工夫や生徒どうしの学び合いを促進させる工夫が効果的になされていた。

○学習活動３ではほとんどの生徒が田沼の政治のキーワードを「商工業の重視」としていた。ただ一つのペアだけが「農業の重視」としていた。これを教師が取り上げ学級全体で納得のいくまで話し合わせる過程において，学習指導要領解説社会編に示された「理解」にたどり着いていく生徒の姿が見られた。

○学習活動３において生徒全員が十分な理解ができているため学習活動４の協同的な学びが大変効果的であったと感じた。また色分けされた意見カードやホワイトボードなどの学習ツールを意思表示だけではなく思考・判断する際のツール（外的リソース）として使用している生徒がいた。その姿から他者との学び合いの場面において外的リソースを用いながら思考・判断・表現することの学習効果の高さを確認することができた。



学習活動４における意見カード

○「教育のユニバーサルデザイン」の考えが随所に生かされており，学習ツールの使い方や生徒が「何を」「どのような方法で」「何のために」思考・判断するのかが分かりやすく提示されていた。「すべての生徒が伸びる」学びを構成するためには極めて大切なことである。

●自分の考えを意見カードに書いて小集団学習に臨んでいるためまったく発言しなかったりその学習に参加しなかったりする生徒はいなかったがよく発言する生徒や理解の早い生徒を中心に

小集団学習が進められている班があった。すべての生徒を伸ばすのであればそのような班においては教師が積極的に小集団学習をコーディネートするようなことも必要である。

イ　生徒のアンケートより（以下の数値は生徒40名の平均値を示す。５段階評価最高値５）

項目⑤この時間の友達との関わり合いの中から自分の成長に役立つ何かを得た。(4.75) 項目⑥この時間の学びにより，自分が確実に成長したことを実感できる。(4.68) ※項目⑤・⑥において評価を「３」以下とした生徒はいなかった。

ウ　考　察

コの字型の学習形態は生徒にも人気が高く「できるだけ多くこの形態で授業を進めてほしい」との要望が多い。ペアやグループでの活動も「できるだけ多く」との要望が多い。生徒はこれらの楽しさも有用性も感じている。今後もこれらの活動を継続して取り入れすべての生徒が他者とともに学ぶ楽しさを味わい，個々の学びを深め，そして「すべての生徒が伸びる」ことのできる「きょうどう」の精神を発揮する学びをデザインしていきたい。

このことを具現化するためには，社会科を苦手とする生徒に対する指導をさらに充実させなければならない。「教育のユニバーサルデザイン」の観点からアプローチすることはもとより，例えば単に分かっている生徒が分かっていない生徒にうまく説明をさせるだけでなく，理解できていない学習者が上手に質問できるようになるスキルを身に付けさせるといった指導が挙げられる。理解できていない学習者が上手な質問をすることは，教える側にとっても教わる側にとっても双方の理解が深まることが認知心理学の研究で明らかにされている。また上手な質問とは「なぜ」や「仕組み」に関わる質問であることも明らかにされている。これらを踏まえれば，他者との「きょうどう」が効果的になされるようすべての生徒に社会的事象の意味や意義を理解しようとする発想を持たせることや自分の分からないことをはっきりさせようとする姿勢を身に付けさせることにアプローチする学習指導を充実させなければならない。と同時に，ホワイトボード等の学習ツール（外的リソース）を使って思考したり他者に自分の考えを説明したりする技能や自分の理解状態を意識化させるメタ認知的方略についての指導の工夫について，今後さらに実践研究を積み重ねる必要性を感じている。

近年，21世紀型学力を育成する観点からアクティブ・ラーニングという言葉が改めて注目されている。このことを踏まえれば日々の学習の中で生徒どうしの学び合いを充実させる実践研究は，大変有意味なことであると考える。さらに研鑽したい。

参考文献

中尾敏朗（2011）　「持続可能な社会とこれからの歴史学習―現代の社会がわかる歴史学習に向けて―」日本社会科教育学会『社会科教育研究』P21－28

市川伸一（2012）　「教えて考えさせる授業 中学校」図書文化

磯田道史（2012）　「さかのぼり日本史⑥江戸　天下泰平の礎」ＮＨＫ出版

第３章　おわりに

今年度も地理的分野と歴史的分野において，生徒どうしの学び合いによって，社会的な見方や考え方をさらに広く，深く成長させ，自信を持って社会にふみだし，参画することのできる生徒を育てるべく，研究・実践を進めてきた。今年度は特に，「育てる」から「育つ」への教師の指導観の転換を念頭に置き，生徒が身に付けた知識，理解，概念等を活用し，生徒自身が持っている力を引き出して問題解決に至ることができるような単元構成や学習問題を工夫した。また，自尊感情の醸成に資する生徒どうしの学び合いにおいて，「きょうどう」の精神を発揮させやすくするために，何のためにどの「きょうどう」を発揮させるのかを吟味し，生徒どうしの関わり方をコーディネートした。これまでの研究で得た成果と課題を基にさらに研鑽を重ねたい。

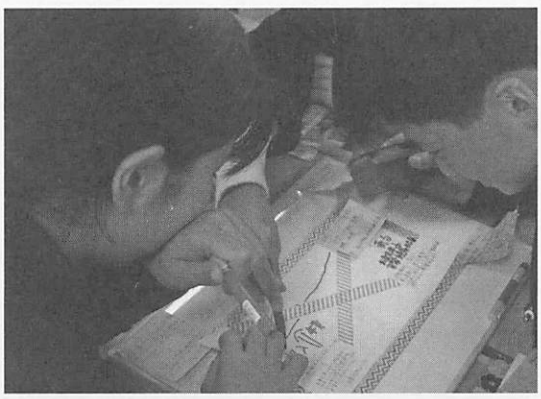
１　問題解決的な学習の充実

研究（その１）では，既習の学習で身に付けた視点や考察の仕方を活用しなければ解決できないような学習問題を設定した。また，研究（その２）（その３）では単元の最初に単元を貫く学習問題を設定し，その解決に向けた過程において積み重ねた問いの追究成果を活用することで解決に至る単元構成とした。その結果，生徒は身に付けた知識や概念等を引き出して，相手に伝わるように再構築して自分の言葉で仲間に伝え，学習問題の解決に迫ることができていた。また，研究（その１）では，自分たちの身近な地域社会の発展に資する提言をさせ，研究（その２）では，問いの一つに身近な地域の歴史に関するものを設定し，研究（その３）では，歴史と結び付く「現代の社会事象」を取り上げることで，「自分ごと」として追究させることができたと考える。

身に付けた知識や概念等を活用せざるを得ない状況や自分一人の学びだけでは解決に至りにくい状況を作り出す学習問題や学習展開が生徒自らに内在する力を引き出させ，「育つ」ことに有効であることが分かった。また同時に，知識や概念，見方や考え方を引き出し活用させるためには，それらを確実に習得させておかなければならないことを再確認した。

２　生徒どうしの学び合いの充実

研究（その１）（その２）では，小集団での活動において，一人一人が異なる視点から得た情報や学習成果を持ちより，それらを活かし合う「協働」の精神を，研究（その３）では，学級全体で同じ結論に至る話合いでは「共同」，他者と協力して納得できる最善策を導く話合いでは「協同」の精神を発揮する学びをコーディネートした。また，研究１～３のすべてで，コの字型座席や付せん紙，ホワイトボード，意見カードを活用し，生徒それぞれの考えやそのつながりを可視化するための学習ツールを工夫した。その結果，仲間の考えを活かして自分の考えを深め広げたり，自分の学びが仲間の学びに活かされていることを実感させることができ，自尊感情の醸成に成果があったといえる。しかし，「すべての生徒が伸びる」ためには，一人一人の理解や能力，個性など個人の特性を教師がまた生徒自身が把握した上で，それを活かし合う学びをコーディネートしていき，生徒の伸びを適切に評価する方法を考えていく必要がある。



学び合う生徒の様子